

火山豆石

NO.109

自然史展示室・「干上がる手取湖とマグマの活動」のコーナーのアンモナイトやキノボリトカゲと一緒にのケースの中に「火山豆石^{かごん ぶまいし}」というラベルのついた大きな石が展示してあります。その石の表面をよく見ると、図のような数mm～1cmくらいの丸い模様がいくつもついています。

この石は、一昨年岐阜県大野郡白川村で採集したもので、5～6千万年前に噴出した「濃飛流紋岩^{のうひ りゅうもんがん}」という、火山灰が固まってできた岩石の一種です。

火山灰の中にできたその模様はなんだと思いますか。

それは、「火山豆石」といわれるもので、調べてみると火山灰を丸めたような構造をしています。それがどのようにしてできたのか（その成因）はいろいろな説があって一般的な解答はまだありませんが、大体三つの成因説に分けられるようです。

＜雨滴説^{うてき}＞

雨が火山灰のたまったところに降って、雨の粒が火山灰を丸めてできたという考え。

＜空中結核説^{くうちゅうけっかく}＞

湿った火山灰が火口から噴出して地上まで降ってくる過程で、お互いにくっつき合ってきたという考え。

＜^{うちわけ}地中結核説＞

火山灰の地層ができてから地下で硬い岩石になる過程でできたという考え。

いくつかの火山豆石を調べてみると、上に書いた三つの説のうちの 하나가正しくて他の二つは間違いということではなく、それぞれ場合によっていろんなでき方があるようです。

実際、1924年のキラウエア火山では、噴火の瞬間、雨のように火山豆石が降りそそぎ、落下しながら生長したのが確認されたということですし、一方、沖縄本島の南端部付近には空から降る「ひょう」が火山灰を丸めてできた火山豆石があるということです。

いろんな火山豆石のできかたによる特徴が明らかになれば、逆に、火山豆石からそれができた当時の様子を推定できるようになるでしょう。

化石による資料がほとんどない5～6千万年前の岐阜県大野郡白川村付近の様子が、火山豆石の観察から推定できるようになるかもしれません。

(H. A.)



富山市科学文化センター

富山市西中野町3丁目1番19号 (〒939)

電話 富山 (0764) 91-2123 (代表)

昭和62年 4月 / 日 発行